

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 8 日現在

機関番号：12601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2010～2011

課題番号：22820016

研究課題名（和文） 「日本的なるもの」の受容と創造

研究課題名（英文） Reception and Creation of “Things Japanese”

研究代表者

鵜飼 敦子 (UKAI ATSUKO)

東京大学・東洋文化研究所・特任研究員

研究者番号：30584924

研究成果の概要（和文）：

19 世紀末の美術史の動きのなかで「日本的なるもの」が日本でどのように作りあげられ、諸外国に受容されたのかを解明するということが本研究の目的である。本研究では、明治期に官僚から日本画家となった高島北海（1850 - 1931）に注目し、その足跡と活動について国内およびフランスとアメリカで調査を行った。高島北海が国外で水彩の即興画を残していたことが明らかとなり、またフランスで結んだ交友関係の証拠となる、200 枚以上の名刺についてデータ化することができた。これらの調査により、近代日本画における高島北海の活動意義を明確にすることができた。

研究成果の概要（英文）：

The main purpose of this project is to see how “Things Japanese” were created in Japan and accepted in foreign countries at the end of the nineteenth century. In this project, I focused on the activity of Takashima Hokkai, a government official in Meiji era who became a *Nihonga* (Japanese painting) painter; Takashima Hokkai. Through my investigations in Japan, France and US, I proved that he publicly demonstrated watercolour improvisational painting. I also compiled more than 200 visiting cards that Takashima collected during his stay in Europe which shed light on the European friendships he had formed. This study define the meaning of Takashima’s activity as a modern *Nihonga* painter.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,210,000	363,000	1,573,000
2011年度	1,110,000	333,000	1,443,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,320,000	696,000	3,016,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学一般

キーワード：芸術、ジャポニスム、異文化交渉史、高島北海、近代、フランス、世紀末芸術

1. 研究開始当初の背景

ジャポニスムという事象のなかでも、19世紀末の西欧において日本美術が導入され、転用・模倣され同化したという受容の段階の研究はすでにおこなわれてきた。すなわち浮世絵と西洋絵画との類似比較やヨーロッパの工芸品への日本的モチーフの転用指摘などがそれである。

研究代表者は、上記のジャポニスム研究の第一段階といえる、日本の芸術が受容された背景やその事例研究からさらに進んだ段階の研究をおこなってきた。それは、日本の技法や美学を習得・理解したうえで抽出した、方法と原理の分析・応用という段階について考えることである。

ジャポニスムの研究について、その背景を簡単にまとめる。フランスで、パリにおける日本美術の受容の状況について1988年に発表がなされ、ここからジャポニスムの学際的研究がはじまった。続いて、日本の自然主義とジャポニスムを関連づけ論文が日本で出版された。これら国内外の研究成果は、フランスと日本で開催された「ジャポニスム」展で一般に向けて公表され、広く知られることとなった。

その後、1994年ウィーンにおける絵画と建築分野のジャポニスムが紹介され、ジャポニスムの研究対象がフランスのみでないことも提示された。

1996年にはモードにおけるジャポニスムについて考察がおこなわれ、日本的モチーフを転写した布の使用のみならず、キモノの構造自体をとり入れた服飾デザインなど、平面作品のみでなく立体作品についても論じられるという新たな広がりを見せている。さらに、2008年には、浮世絵から絵画という従来の平面作品の比較ではなく、日本の平面作品がフランスの工芸品へ転用した様相を明らかにするとともに、ジャポニスムがフランスの芸術家のみならず、批評家たちにも大きな影響をあたえていた事象であったことを再認識する展示がおこなわれた。

しかしながら、これら従来のジャポニスム研究における問題点は、造形芸術の分野におけるジャポニスム研究が西と東の比較にとどまるものであったことであろう。その多くが、両者の「影響関係」の論に終始していたといえる。研究代表者が本研究でめざすのは、アジアという第三の軸をおき、これまで言及されることがあまりなかったアメリカ、中国を調査対象に加えることにより、「日本的なもの」がどのようにつくられ、諸外国に受容されたかを探ることを目指す必要性が生じたというのが、本研究の背景である。

2. 研究の目的

本研究の中心は、「日本的なもの」が日本でどのようにつくりあげられ、諸外国で受容されたのかを解明することにある。19世紀末、ヨーロッパ諸国でジャポニスムとよばれる動きがあったことはすでに美術史のなかで語られているとおりでである。本研究は、この文化の交差に注目するとともに、

これまでのジャポニスム研究でおこなわれてこなかった事項に焦点をあてる。ヨーロッパやアメリカにとって「日本的なるもの」とはいかなるものであったのか、また、近隣諸国の中国や韓国、東アジアでは、なぜ「日本的なるもの」がとりいれられなかったのかを、芸術、科学、近代性に着目することにより究明することが目的である。

研究代表者が近代日本と「日本的なるもの」の受容を考えるうえで特に注目するのは、高島北海という人物である。高島得三（北海）は、農商務省の技術官吏として、中国、韓国、フランス、アメリカで森林学の調査をおこなった。科学と技術の融合を基盤とした地質学から鉱山学、植物学までも学んだ北海は、芸術面でもアルティザン的な技を持っていた点で特異な存在といえる。1885年から3年間、フランス北東部の街ナンシーの森林高等学校に派遣された際、北海は日本から携えてきた筆を用いて実際に画を描いてみせていた。それらの実演を伴った作品をとおり、ナンシー派の芸術家との交流がうまれたこと、またこのような北海の作品が、「即興性」「偶然性」という新しい芸術のありようをフランスの当時の美術評論家および芸術家に示していたことは研究代表者がすでに発表している。芸術的才能のみならず、高島の、西洋の社会生活に容易に溶けこむ柔軟で進取の気性に富んだ姿勢と植物学研究の能力も高く評価されていたことは、当時のフランスにおける地方新聞や芸術雑誌などの文字媒体から、代表研究者がすでに明らかにしたことである。本研究では、上記のこれまでの研究をさらに進め、中国とアメリカでの北海の活動や交流がどのようなものであったかを探り、北海の中国およびアメリカでの影響の射程を明らかにしたいと考える。とりわけアメリカにおいては、芸術活動をおこなったことが明治38年の日本美術協会報告から分かるのだが、その内容や現地での史料調査は、これまでまったくおこなわれていない。フランスの地方都市のみでなく、中国やアメリカにおける日本人の活動およびその波及の程度を明らかにし、グローバリゼーションによって日本がどのような自国アイデンティティーを打ち出し、それが海外でどのようにとりいれられたのかを究明することが本研究の目的である。

3. 研究の方法

国内外での資料の調査、収集の後、それら資料のデータベース化をはかる。特に国外での調査に関しては、北海研究の基礎となるフランスでこれまで発見されていなかった新資料の発見を目標として調査にあたる。また新たに課題を設定したアメリカでは、北海の描いた植物画に関する調査をおこなう。各調査に対し、研究成果を残せるよう、調査ごとに発表の目標を設定する。高島北海について、その造形作品と文献の史料を調査し分析することにより、美術史の研究手法である図像学的研究のみでなく、文字媒体からの分析をあわせて

おこなう。これにより確証性の高い研究成果の提示を目指した。具体的には、2カ年で国内外での史資料の収集、調査をおこない、その成果を、学会以外にも一般向けの講演などで口頭発表し、学術論文以外にも新聞メディアなどにとりあげてもらうかたちで公表をおこなった。

4. 研究成果

成果は大きく分けて以下の3つに分けられる。

(1) フランスのナンシー美術館とロレーヌ歴史博物館で調査をおこない、北海の作品を確認した。高島とナンシー派の芸術家の交流について、ナンシー美術学校においてフランス語で発表し、美術展カタログに日本語論文、および英文要旨が掲載された。

(2) 下関市立美術館での調査結果として、高島北海が収集した200枚を超える名刺を翻刻、データ化し、表にまとめて美術館紀要に発表した。

(3) ワシントンのフーリア美術館内において、「北海山水百種」70幅の高島の作品を確認した。またワシントンの議会図書館で調査をおこない、セントルイス万国博覧会前後の新聞や芸術雑誌の資料収集をした。

具体的な調査とその成果内容は以下のとおりである。初年度には、9月にフランスのナンシー美術館とロレーヌ歴史博物館で調査をおこない、北海の作品を確認した。さらに、当時のナンシー派芸術家のアトリエ写真などから、北海がナンシーで芸術家として受け入れられ、同時に多くの即興画を残していたことを明らかにすることができた。このうち、新たに発見した作品については、新聞で報道がなされた。ロレーヌ歴史博物館での調査結果については、12月におこなわれた日仏美術学会で日本の和紙や意匠がどのように装幀芸術にとりこまれたのかを発表した。また、ナンシー美術館における日本美術のコレクション調査については、高島北海がフランスに残した作品について2月に下関市立美術館で講演し、その内容が地元メディアで紹介された。これらの口頭発表の後、北海と異文化交渉史について、日本における北海の評価についてそれぞれ論文をまとめ発行された。また、北海作品の調査については、英文での要旨が美術展カタログに掲載されたことから、研究の成果を活動報告として一般に広く公開することができたといえる。

2年目の調査では、とりわけ明治期の日本画家、高島北海の足跡・活動について新しい事実が分かった。4月にアメリカ、ワシントンのフーリア美術館内において、「北海山水百種」70幅の高島の作品を確認した。またワシントンの議会図書館において、セントルイス万国博覧会前後の新聞や芸術雑誌の論評を調査し、高島北海に関する文字媒体資料の収集をおこなうことができた。このことから、フランス以外の土地でも、高島が作品制作の実演を行っていたことが明らかとなった。この調査結果は、「セントルイス万国博覧会(1904)の日本人」と題して国際日本文化研究センターが

主催する国際シンポジウム「万国博覧会とアジア」で発表をおこなった。さらに美術館が発行している機関誌『潮流』に「高島北海とアメリカ」として調査報告が掲載された。この他の調査としては、1月に下関市立美術館において高島が欧州で集めた名刺236枚の調査をおこなった。その結果、国立森林学校の関係者や学校の留学生のみならず、様々な国籍の園芸関係者、芸術評論家や美術雑誌の編集者、美術館関係者、博覧会の審査員と高島が交友の輪を持っていたことが明らかとなった。この調査結果は下関市立美術館研究紀要に論文と翻刻、資料データが掲載された。なお、10月にはフランスのナンシー国立美術学校においてTakashima et les artistes de l' Ecole de Nancyというテーマで公開講座の講義を行った。高島北海の日本画家としての海外における活動は、「日本的なるもの」がどのように受容されたかを知るひとつの指標となろう。本科研で明らかとなった史資料は、国同士で取り交わされた公式な文書などの記録からは分らない、一般レベルの文化交流が存在していたことの証拠となるものであり、本研究の大きな成果が得られたといえる。

これら2年にわたる各調査の項目に関して、調査から公表までの一連のタムをできるかぎり短くすることで、効果的に資料収集、調査、公表をおこなった。初年度には効果的に海外での調査をおこなうことができ、その結果は国内の新聞メディア等に取り上げられ、成果を一般に公開することができた。2年間の研究活動で、当初かかっていた計画事項はすべて達成できた。さらに、海外において外国語で研究内容を発表するという機会を得たことで、国外にも成果を公表することができ、計画以上に目的が達成されたといえる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

- ① 鶴飼 敦子「河村コレクション「欧州交友名刺帖」をめぐって—高島北海によってフランス滞在中に収集された名刺を中心に」、下関市立美術館研究紀要第13号、査読無、2012年、1-51頁
- ② 鶴飼 敦子「高島北海とアメリカ」『潮流』No. 109、査読無、2012年、2-3頁
- ③ 鶴飼 敦子「人と作品 高島北海——旅する孤高の山岳画家」『紫明』第28号、査読無、2011年33-41頁
- ④ 鶴飼 敦子「高島北海と異文化交渉史」『高島北海展図録』下関市立美術館、査読無、2011年、152-158頁

- ⑤ Atsuko UKAI,
Takashima Hokkai in Cross-Cultural
History, *HOKKAI Searching for the secrets
of nature*, Shimonoseki Museum, 2011,
pp.6-7

[学会発表] (計 5 件)

- ① Atsuko UKAI, *Takashima et les artistes de
l'Ecole de Nancy*, 招待講義、2011年10月25
日フランス・ナンシー・Ecole Nationale
Supérieure d'Art de Nancy
- ② Atsuko UKAI, *The History of Le
Japonisme as a GLOCAL Study*, 東大フォー
ラム、2011年10月21日、フランス・
リヨン・Ecole Normale Supérieure de
Lyon
- ③ 鶴飼 敦子「セントルイス万国博覧会
(1904)の日本人」国際シンポジウム「万
国博覧会とアジア」、2011年9月30日、
国際日本文化研究センター
- ④ 鶴飼 敦子「高島北海とナンシー派の芸術
家」特別展没後 80 年高島北海展講演会、
2011年2月13日、下関市立美術館
- ⑤ 鶴飼 敦子「ナンシー派芸術と日本の工
芸」日仏美術学会、2010年12月18日、京
都大学文学部

[その他]

ホームページ等

平成 23 年 1 月 13 日 (木) 付、毎日新聞 (朝
刊) にナンシーにおける調査結果が掲載

平成 23 年 2 月 15 日 (火) 付、山口新聞 (朝
刊) に下関市立美術館での講演が掲載

平成 23 年 2 月 20 日 (日) 付、毎日新聞 (朝
刊) に下関市立美術館での講演が掲載

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鶴飼 敦子 (UKAI ATSUKO)

東京大学・東洋文化研究所・特任研究員

研究者番号：30584924

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：